世界に誇れるアーカイブ

日比野　オープンアーカイブは収蔵庫のような機能を持っています。当然、収蔵庫は外部に見せるものではありません。商業ビルの中にガラス張りの収蔵庫がある。これはありえない風景なんです。どう使っていくかが問われるでしょう。美術館の先入観を変えていけるといいですね。

伊藤　商業ビルの中にガラス張りの収蔵庫があるのは、世界中でここだけかもしれません。

藤井　世界に誇れる場所になりますね。それはとても楽しみです。

日比野　ガラス張りで外からも見える、まるで水族館のような風景だよね。ピーンとした違う空気感が漂っています。

藤井　スチール製のラックに作品を掛けるんですよね。初めて見ました。

伊藤　いろいろな大きさの作品が掛けられるため、収蔵庫で使われています。ラックなら作品の裏まで見ることができますから。

藤井　上野の芸大美術館に平櫛田中（ひらくしでんちゅう）の作品が飾られていました。その作品の裏に本人のメモが書いてあったんです。そういった作者のメッセージも見えるような展示もできるのではないでしょうか。

日比野　裏が見える展示をするのであれば、なおさら何をここで見せるのか、重要になりますね。

伊藤　キャンバスやパネルの裏も見えますね。構造を知らない人も多いでしょうし、知ってもらう良い機会になりそうです。

ＶＩＶＡの役割

藤井　都市生活者は、仕事の顔と、プライベートの顔を使い分けているように感じます。でも、人間はそれほど単純ではありません。オールラウンドで、いろいろな側面があると思います。

　体験を通して、自分のふとした興味に初めて気が付く場。自分が学んでいこう、といったきっかけになり、人生がより豊かになる。駅ビルという立地の意味もここにあると思います。

伊藤　日比野さんが考えた、「たいけん美じゅつ場」という名前の力は大きいです。ここが何をしようとしているのか、教えてくれます。作品や作家を通してどんな体験ができるのか、常に忘れないようにする。それが大切なんです。

日比野　今、街中はスマートフォンを片手にイヤホンを付けた人たちであふれています。体は隣にいても違うことをしている、画面の中で同じことをしていても、現実では別々の場所にいる…。そんなバーチャルの時代に対する危機感があります。だからこそ実際に体験できる・交流できる、ＶＩＶＡの役割は大きいはずです。

　人間が正しく健康に過ごすために必要な場所にしていきたいです。体は病院で治し、心はここで癒す。心を豊かにすることが、生きるための活力になります。

　ここの空間が人を育てていくでしょう。いろいろな人と出会い、知り合える所です。

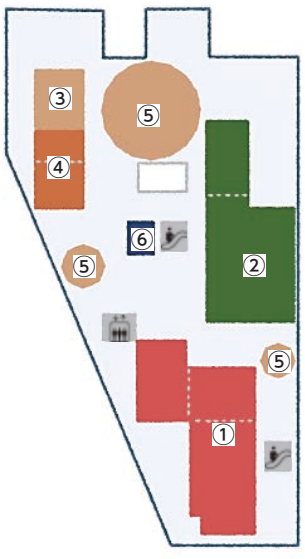
伊藤　ＴＡＰの活動を通して、僕も取手に育ててもらいました。取手は２番目の故郷だと思っています。

　ＶＩＶＡはアートを介して知り合い、育っていける場所です。取手にはそういう場所がある、それを発信していけば、取手モデルになっていくでしょう。

藤井　多くの市民が集まり、愛される施設にして、これからもアートのあふれるまちづくりを推進していきたいと思います。本日は貴重なお話、ありがとうございました。

撮影地：とりでアートギャラリー

VIVA レイアウト



①とりでアートギャラリー
②東京芸大オープンアーカイブ
③大人の休日倶楽（くら）部ライブラリー
④ラーニングルーム・工作室
⑤フリースペース
⑥プロジェクトルーム

Note

　とりでアートギャラリーは、最も大きいスペースのギャラリー１、オープンスペースのギャラリー２、比較的小さく、壁の一部がガラスになっているギャラリー３で構成されています。

◆オープン記念郷土作家展開催中

〈日時〉１月12日（日）までの午前10時～午後７時
※１月１日（水・祝）・２日（木）は休館

Note

　東京芸術大学オープンアーカイブでは、卒業・修了作品などを保存・展示しています。周囲はガラス張りで、外からも中を見ることができます。

「たいけん美じゅつ場（VIVA）」という施設名・ロゴマークは日比野氏がデザインしました。写真のロゴマークは、VIVAの中で見ることができます。

　日比野氏と伊藤氏はTAPと連携して、VIVAのオープンに向けて準備を進めてきました。（写真右からTAP羽原康恵氏、TAP五十殿（おむか）彩子氏、日比野克彦氏、伊藤達矢氏）